

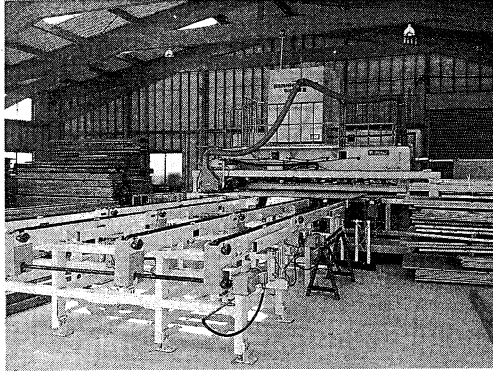
# 杉CLT供給体制着々と

## 高周波連続幅はぎプレス装置導入

山佐木材(鹿児島県肝属郡、佐々木幸久社長)が、杉CLT(直交集成板)の供給体制整備を進めている。14年後半には高周波連続幅はぎプレス装置を導入。また、鉄骨造の高層ビルの床に杉CLTを使用するための2時間耐火試験でも良好な結果が出ている。

### 高層ビル床用2時間耐火試験も結果良好

同社は14年6月に杉全層幅はぎ評価プライのCLTのJAS認定を取得し、既に製造・販売を開始している。ただし、今後の本命として頼り、CLTの幅はぎプライを効率的に生産するため高周波連続幅はぎプレス装置を導入した。鹿児島県の助成事業を活用した。同機の主な仕様は、長さ4.5m、幅4.5m、厚み15〜45



導入した高周波連続幅はぎプレス装置。今後は後工程を含めた杉CLTの生産集約化を進める

のラミナを投入し出上りの幅はぎ板サイズは縦4×横(幅はぎ方向)8までが生産可能になる。生産能力は1シフトで1日40立方メートル。また、任意の幅でのカットも可能になるため、大断面集成材用ラミナの生産が容易になるなど、同社全体の歩留まり向上にもつながることが期待される。さきに大分県初のCLT実物件となったJR大分駅前の長距離高速バス待合所の製造でも活用された。幅はぎ作業棟は同社の生産した構造用集成材を使用し、建屋面積

約500平方メートル(間口25、奥行20メートル)。将来はこれを桁行方向に伸ばして増築し、幅はぎ工程以降のCLTラインを設置して生産を集約化していく計画を持っている。

一方、CLTを鉄骨造の高層ビルの床に使用するためには、接合・強度とともに耐火性能が要求される。林野庁委託事業により、13年度は接合・強度、14年度は同社が事業主体となり、「超高層ビルに木材を使用する研究会」(会長||稲田達夫|福岡大学工学部教授)の協力を得て、床2時間耐火加熱試験などを実施。今年2月末には建材試験センター(西日本試験所で最後の試験(被覆タイプ)が行われ、性能評価であれば合格を得られる結果になった。また鉄骨材への接合、コストなど検討項目はあるが、今回の試験で床材としての最低限の性能は確認されたことになり、実物件採用に向けた動きも着々と進んでいる。

日刊木材新聞

平成27年(2015年)3月31日(火)